

第8回沖縄建築賞 審査講評

★応募作品20点中、第1次審査で各審査員が選考した5作品についての講評

中本 清(沖縄県建築士会会長・審査委員長)

今回のコンペは、住宅以外の用途で、かつ 1000 m²以下との制限が加えられたにも関わらず、参加作品 20 点の応募がありました。審査委員長として参加者の方々に感謝申し上げます。全作品とも甲乙付け難く、審査会泣かせのコンペでした。沖縄建築大賞 1 点、奨励賞 2 点が審査の結果決定しましたが、そのコンセプト、技術、表現ともきわめて高水準でした。特に、大賞作品は、建築物の緑化が経済的にも十分成り立ち、これからの都市景観の創造のメルクマールになることは間違いないと感じさせました。私は審査に際して、2 点の基準で行いました。

- ① 蒸し暑くかつ自然環境と共存する文化を有する我が沖縄の置かれた地域特性に建築はなにができるのか？
- ② 沖縄が、今後とも生活水準を向上させ、発展著しいアジアの都市戦略で最も優位に立つためには、建築はどうあらねばならないか？
その目線で下記の 5 点を選ばせていただきました。

作品No.9 「沖縄弁護士会館」

コンセプトは「緑と共生」。事務所ビルとして優れた建築計画・デザインの力を感じました。それだけでなく、さらに沖縄の花 6 種類を用いて、日射遮蔽・換気通風を行う技術は、建築と緑との関係に新しい地平を拓くこれからの都市空間のあるべき姿だと思います。

作品No.4 「心療内科クリニック」

コンセプトは「癒し・自然・温もり」。「木」をふんだんに使い、庭の自然と一体化、自然な素材、優しい動線、リビングでくつろぐような空間、外部の人々にも開放されたカフェなど、あとで作者が判りましたが、ベテランらしい匠の技に納得しました。

作品No.6 「恩納村斎場」

村の地域によって告別式・火葬の流れが違うらしいです。その条件に合せた明快な平面、霊柩車など車両動線、ひとつ屋根の下の火葬場と斎場の分離など平面計画の巧さを感じました。特に、半戸外型の斎場ピロティは、真夏の告別式に参加した経験から、どうしてもこのような空間が必要だと思っていました。大型の建具を開ければ、恩納村の森に生まれた風が吹き抜け、目を山に移せば、自然の木々の変化を体感できる工夫が生きています。

作品No.3 「沖縄長寿苑」

コンセプトは、住宅のような同時に都市のような空間。具体的には、機能性を高めた直線的な動線とゆとりをもった流動的な動線の組み合わせで、動線の明快さと開放的な空間、彫の深い外廊下、敷地の高低差を活かした平面計画など、介護施設でここまで出来るのかと感心させられました。コンクリートの施工技術も秀逸だと思います。

作品No.8 「道の駅」

沖縄の気候風土のキーワード「アマハジ」、「アサギ」などの住宅系の空間単位を、屋根の分節化と、回廊による一体化などを要素とした計画の巧さを感じました。とかくキーワードだけが先行し、具体性がない建物になりがちですが、この建物は違いました。道の駅にふさわしい赤瓦のランドマークの「象徴性」も好ましいと思いました。

武岡光明(沖縄県建築士事務所協会理事)

作品No.9 「沖縄弁護士会館」

緑化による省エネ効果を積極的に取り入れた作品である。

将来、植物が成長しときの建物も楽しみではあるが、台風等の強風や塩害に対して植物がどのように成長していくかも楽しみである。

作品No.10 「数久田地区会館」

沖縄らしさと言えばすぐに赤瓦をイメージすることが多いが、本作品は外観の赤瓦よりも空間構成に沖縄らしさを感じる作品である。地域の人々が年齢を問わず楽しく利用する姿を感じる。

作品No.11 「赤嶺公民館」

使いやすさと経済性の兼ね備えた、コンパクトにまとまった優れた作品である。予算が少ない中、施主の要望を満足させるために、葛藤した設計士の苦悩が感じられる。

作品No.14 「プライベートリゾートホテルRENN」

海に直接面していないが、沖縄の自然を五感で体験できる心地よい空間を感じ取ることができる。形態的に沖縄らしさはないがデザイン性に優れた作品である。

作品No.17 「グリーンオフィス」

平面的には経済性を重視した普通の事務所ビルではあるが、建物の配置で緑地部分を積極的に確保し、視覚的な癒し効果だけでなく、沖縄の強烈な太陽から建物を守る省エネ効果も感じられる作品である。直接、敷地に植栽することによるメンテナンス費用など経済性もよく考えられた作品である。

前田 慎(日本建築家協会沖縄支部理事)

作品No.1 「久米にあるオフィスビル」

企業コンセプトは明確かつ明瞭である(はず)。その為、オフィス系建築はコンセプトに還元しやすい傾向にある。オフィスの場合、細かな平面計画より多様性を内包した大らかな空間が所望される向きがあり、プランしやすい傾向にある。他用途建築に対して、そうしたアドバンテージが多いという事を鑑みても、1次審査で選んで置きたくなった。高さ制限があったのだろうか？説明が無いのでわからないが断面計画が緻密。デザインも含め総じて矩計にこだわっている。建築家としての強固な意志が伝わった。一方で他のデザイナーとのコラボ、柔軟な取り組み。シンプルな中にも多様な表現がある案。

作品No.4 「心療内科クリニック」

ザ・沖縄、沖縄アイテム満載の建築は何案もあったが、この案は佇まいや風情にそれらを結実していると感じた。よく見ると金属ボルト屋根や矩形コンクリート棟があり、「そんな、しなくてもいいのに」と思ったが、ふと見やると町並みの一部みたいで、敷地内にミニ街があるようで、「なるほど、これもありかな」と。その事で、瓦の心療所棟は現代の町並みから乖離せず、浮いた感じを一切させない、馴染んだ景観になるのだろうと思った。沖縄的材料へのこだわりと言うより、建築試行による景観への配慮、かつ、景観への積極的な関与の一つの方法を提示しているように思えた。

作品No.9 「沖縄弁護士会館」

例えるならば、今はまだ完成していない建築。来年か再来年評価を受ける建築、壁面緑化植物が十分育ってから評価する建築と思った。とは言え大賞までの道のりは、ほぼ電撃。明確なコンセプトと先進性への躊躇ない取り組みなどなど、必然上位評価案。

作品No.11 「赤嶺公民館」

可もなく不可もなく、まさに「ふつうの上等」と一見見える。最終審査最終段階です〜と上がってきた案。予算が少ないなど理由あつての事と思う、建築は至って平凡。地域住民と建築空間との関係性を軸に据え、そのことをより際立たせる為に、建築造形を至極そぎ落とし、空間設計に充分こだわり注力思案した案と解釈。小手先の建築デザイン計画とは一線を画し、腰の据わった印象を持った。スルメのような建築案！？

作品No.19 「スペイン・バルBARUMA」

オープンテラスのバル。川沿いの店舗。スペインの街に組み込まれた雰囲気そのまま出そうとしている平面計画。小さな店の単位だが、川に面した建物や店が全てこれにならってくれたならば、表参道のように並木を植えて整えてくれたならば、きれいな町並みができるだろうと想起させる。建築が人の営為の上に進歩するのならば、街は連続と続く建築行為の上に発展する。ある建築スタイルが賛同者を得て続いて行き町並みが形成される、何十年と先のストーリーをふと感じた。インテリア計画案は対象ではないが、他の内部完結型建築案の方がよりインテリア系提案に見えた中、この案は都市空間を考慮した建築の提案と解釈し、1次審査にて今回だけ1票投じた。

下地信夫(沖縄県建築士会副会長)

これは、困った 今年の募集要項には「住宅系以外」とある。
提出された応募作品は、事務所系、医療系、集会施設系、宿泊系等々と多様な用途があるため、共通したコードではセレクトが利かない、とにかく力技で第一次審査の5点を選出した。

作品No.3 「沖縄長寿苑」

のびやかな造形、機能及び材料等 平均以上だと思います。特に「医薬分業」で、お粗末になりがちな薬局を見落としていない気配り 好印象です。

作品No.11 「赤嶺公民館」

見るからにコストの制約があるなかで、空間構成及び既景観との繋がりは、申し分ないと思います。

作品No.12 「Y眼科・A薬局」

矩形に取り付くオーバーハングした逆円錐体とエントランスの造形には多少の違和感はありますが、全体的に好印象を持ちます。スロープにあるのは「ベンチ」？

作品No.14 「プライベートリゾートホテルRENN」

旧城辺町の片田舎 島外からの旅行者にしてみれば十分に非日常性を堪能できるロケーションでのこの形態は、腑に落ちません。施主の道楽ここに極まれるでしょうか。

作品No.17 「グリーンオフィス」

コストの制約のなかで、「なにもできない」ではなく、結果として「なにもしない」方が抑制の利いた造形への近道ようです。ローコスト万歳。

雑感

建築に携わるものとして、建築が発生し解体に至るまでに想いをはせ、施主又は使用者等を「顧客」として捉え「顧客満足度」(CS=Customers Satisfaction) 或いは「説明責任」(Accountability) について、より強固な視座の構築が求められていることを認識すべきものだと思います。

根路銘安史(第7回住宅建築賞大賞受賞者)

今回は、これまでの住宅建築賞から、住宅系以外の建物、沖縄建築賞。住宅ではできない建物や、あえて生活感や、場所性、地域性を評価せず、施主や、企業のイメージや、要求に建築的にどう表現しているかを審査の基準にしました。

作品No.1 「久米にあるオフィスビル」

中心地の限られた敷地に、印刷を行う企業の洗練されたイメージが建築的にも良く表現されています。道路からのファサードでの、エッジのきいたフレームのシャープさや、2階ロビーのビビッドな色の家具や、グラフィック デザイナーとのコラボレーションがうまくバランスがとれていてスマートです。屋上テラス、会議室は、大きな商談等をうまく成立させたい建築家の心づかいが、読み取れます。シンプルなデザイン表現のなかに建築のうまさ、楽しさがあります。

作品No.2 「クリニック」

限られた敷地に駐車台数を最大限に確保し建物をレイアウトしている。その効果で、建物の道路からのセットバックが天空率を大きくし気持ちが良い、そしてルーバーから透けて見える緑がさらに圧迫感をなくし、親近感をおぼえる。また、内部廊下の道路からの視線を遮り、明るく気持ちよい空間を演出している。待合室の久茂地川沿いの緑を借景としたピクチャーウィンドウと、川の流れを引き込んだようなイメージの水盤も場所のイメージを連想させ綺麗で心地よい。

作品No.12 「沖縄弁護士会館」

弁護士会館という、堅いイメージを緑で被い、柔らかさと親近感を与えている。緑に囲まれ、日射遮蔽や通風等、室内環境を良くし、ランニングコストの低減を行っている。そして、室内から見える緑と色とりどりの花は、紛争等を扱う施設の緊張した空気や、人々の心に清涼感を与えてくれる。緑で覆われたビルが市

街地に増えてくると、景観や熱環境も変わってくるだろう。まだ、緑が少なく、数年後のイメージを想像しての期待と、評価である。

作品No.12 「Y眼科・A薬局」

シンプルな空間構成と白を基調としたクリニックは、患者に清潔感と、安心感を与えている。待合ロビーは、大きな開口で中庭に面し、緑を取り込み明るく開放的な雰囲気は、目と心をリフレッシュさせそうである。サイン／家具、木の積層された壁は、落ち着いた演出で、全体が調和され、デザインされている。中庭の木々が大きくなると、木漏れ日のロビーでついうたた寝をしていそうである。

作品No.18 「東浜の店舗」

敷地が北側道路に面している為に道路面に大きなガラスの開口部を設けている。埋立地の新しい街を明るく照らし、外部にオープンなテナントは地域の防犯性にも貢献している。水平ラインを意識し、白を強調したシンプルな洗練されたデザイン、空を切り裂くコンクリートのシャープなエッジは、スマートなイメージカラーを持つテナントに良く似合う。

山城一美(沖縄県建築士会まちづくり委員会委員長)

作品No.1 「久米にあるオフィスビル」

執務・作業スペースとコア部分(EV、階段、水回り等)のプランは明快で、効率的な動線処理などの与条件はクリアされているのではないのでしょうか。グラフィックデザイナーと計画初期から協働で行い、ロゴ、サイン計画と共に「紙を折ったような」特異な形態の外観デザインが情報発信している。

作品No.9 「沖縄弁護士会館」

弁護士会業務が3層に機能的にコンパクトに収められた会館建築である。特徴的なのはコンクリートとガラスのファサードに緑を配したところにある。管理面にも配慮がなされ、沖縄の強い日差しを和らげる効果を発揮することでしょう。「花と緑」は社会正義の取組みを情報発信するのにふさわしい清々しさであり、道行く人々を楽しませてくれるに違いないでしょう。

作品No.10 「数久田地区会館」

集落を構成する家々と路地空間をそれぞれ「諸室機能」と「すーじぐわー」に見立てて、平面構成がされている。「すーじぐわー」を行き交う人々はユンタクを楽しみ、目当ての場所へと導かれていく回遊性が特徴なのだろう。それにしても、西海岸、名護湾の視界は真青で赤瓦の家並みとのコントラストが鮮やかである。

作品No.12 「Y眼科・A薬局」

アプローチからエントランス、待合のロビーへと続く動線、適所に配された緑化計画、来院者の目を楽しませてくれるサイン計画、インテリアデザイン、連絡する院外薬局への動線処理等、練られた平面計画・空間構成は設計者の理念、目的を達成したことでしょう。

作品No.14 「プライベートリゾートホテルRENN」

人々は非日常的なモノ、コトを旅に求める。このプライベートリゾートホテルはそのような人々に打って付

けでしょう。眺望に恵まれたこの地、この空間で癒され、リフレッシュし、日常へと戻っていく。リピーターとして再び訪れる日まで…。

平安山英進(沖縄県建築士会建築設計競技委員会委員)

作品No.2 「クリニック」

那覇市の商業地区に立地する整形外科クリニックです。コンクリート打放しとアルミルーバーの組み合わせはすでにポピュラーなデザインアイテムですが、正面のほぼ全面をカバーするアルミルーバーとコンクリート仕上げとのカラーバランスが良くデザイン的に目を引く建物です。また、ルーバーによる目隠し効果や採光による室内は明るく、坪庭の緑空間と相まって開放的な心安らぐ室内を演出しています。空間構成はシンプルで明快、機能的なクリニックと感じました。

作品No.4 「心療内科クリニック」

心療内科クリニックの建物です。コンセプトが十分に生かされた建築物だと感じました。心療内科を受診される患者さんは心の安らぎを求めると同時にプライバシーを気にされる方が多く設計においてもその点に十分気を配る必要があります。コンセプトでの“病院らしくない病院”はまずファサードから始まり赤瓦屋根、石灰岩の石垣、木々の緑が優しくアプローチ、エントランスホールでは視線が南庭へ抜け緑が迎える考え方も良い案だと思いました。プライバシーについては、患者さん同士の視線交差を少なくするため視線が坪庭や南庭に向かう工夫も検討されていてきめ細かい配慮が感じられます。写真で読み取っただけですが、南庭に陰影の作れる中高木があるとさらに気の安らぐ緑の空間が提供出来たのではないかと考えています。

作品No.9 「沖縄弁護士会館」

今年の夏、日本列島は記録的猛暑に見舞われました、地球規模の異常気象をはっきりと感じ取った人々がほとんどだと思います。弁護士会館のコンセプトは“地球環境に優しい省エネルギーな建物を緑と共生させることで試みる”となっています。空間構成や動線計画においてはオーソドックスで奇を衒った所はありませんが、地球環境問題を捉えた建築の実践です。壁面緑化、雨水利用、太陽光発電、緑はまだ生育初期の段階ですが弁護士会館における建物と緑の共生による省エネルギーや、壁面緑化による街区への良好な景観提供を期待して選びました。

作品No.14 「プライベートリゾートホテルRENN」

まず外観で目を引くデザインです。コンセプトは“永続的な経済性の追求”、南の島での永住を決めたクライアントの生活を担保する為、コマース的な建築デザインから生活を提案したとプロジェクトのミッションを説明しています。3室に分割されたペンション部分の客室は各々が樹木をイメージした7本の鉄柱で3層持ち上げられ独立した特異な形態を見せています。宮古の美しい海を存分に眺望するには客室部分を3層程度まで浮かす必要があります必然性から生まれたデザインなのかもしれません。“永続的な経済性”を追求したクライアントと建築家の信頼関係、建築に対する情熱、理解があって生まれた、ミッションを完遂したインパクトのある良い作品です。

作品No.18 「東浜の店舗」

昨年の審査員特別賞受賞者の作品と思われます。床、庇、屋根、ガラスだけで構成し水平線を強調した建築作品。写真から見る限り基本コンセプトは十分に生かされ店内から漏れる明かりも水平線を美しく演出しています、ただ庇部分の雨水処理や美観維持の対策がどのように検討されているのかが気になりました。商業建築としてのイニシャルコスト、レントブル比は良いと感じました。